

2010 ワールドカップにおいてボランチのタッチ回数とタッチ数の研究 (日本代表とスペイン代表ボランチの比較)

安本 真哉 (競技スポーツ学科 情報戦略コース)
指導教員 望月 聡

キーワード：ポゼッション ボランチ ボールタッチ

1 緒言

2010年、ワールドカップにおいて華麗なポゼッションサッカーを展開し、優勝に至ったスペイン。一方、守備的な布陣からのカウンターサッカーで、見事に決勝トーナメント進出を果たした日本。そこには、それぞれ優れたボランチがいることが、大きな要因であると考えられる。

しかしその中でも、優勝チームのスペインとベスト16であった日本。ポゼッションサッカーを貫いたスペインと、カウンターサッカーをせざるを得なかった日本。そのボランチにおける違いに着目した。さらに、細かくフォーカスすることで、攻撃時、ボランチに求められる能力であるボールタッチ回数とボールタッチ数に大きな違いがあると考えた。

本研究では、日本で最も優れていると考えるボランチの遠藤保仁、スペインで最も優れていると考える XAVI (シャビ) の両選手のプレーを解析しボールタッチ回数とボールタッチ数を比較することによって違いを検討する。

※ここでは1試合を通してボールに触れた回数をタッチ回数とし、その際ボールをコントロールした回数をタッチ数とする。

2 研究方法

本研究の調査対象は、今回の2010 ワールドカップ予選と決勝トーナメントの日本とスペインのそれぞれの試合のデータを収集し、1試合を通しての遠藤保仁、XAVI (シャビ) 両選手の平均ボールタッチ回数とボールタッチ数を調査する。また同時に、走行距離、プレイエリア、パス成功率も調査することで、両選手を比較しやすいものとする。

3 仮説

素早い判断、プレーが必要となってきた現在では、両選手ともにタッチ回数は多く、タッチ数は少ないと考えられる。しかし、よりポゼッションの高いスペインの XAVI の方がその数値が極端に高く表れると考えられる。

4 結果

1試合の走行距離、プレイエリア、パス成功率に関しては両選手とも大きな差はなかった。しかし、平均ボールタッチ回数とボールタッチ数に大差があった。また、ボールタッチ回数に関しては、2倍近くの差があったことが判明した。ボールタッチ数、遠藤はタッチのほぼ8割近く1タッチか2タッチでプレーしているのに対し、シャビ (XAVI) は5~6割であった。3タッチ、それ以上のプレーが目立った。

この二つの大きな違いがボール支配率に大きく関係していることが明らかになった。

素早い判断と少ないタッチが求められている中で、いかに個人でボールをキープでき、支配率を高めることができるのか。その存在がチーム全体の支配率を引き上げるのは間違いのないことであろう。

私自身、指導者としてこれからアプローチする中で、本研究で得たポイントであることを取り入れて活動していくこととする。

参考文献

- ・財団法人日本サッカー協会
(<http://www.jfa.or.jp/>)
- ・テクニカルニュース
(財団法人 日本サッカー協会)
- ・FIFA (<http://www.fifa.com/>)
- ・Number
- ・Number Web (<http://number.bunshun.jp/>)